

同じ舞踊運動を繰り返し踊ることと 体感の関係について(2)

—保育者養成カリキュラムにおける授業を事例として—

十文字学園女子大学 坪倉紀代子
神戸大学 柴 眞理子
高知大学 山田 敦子

<研究目的>

先行研究結果¹⁾からの継続課題である「舞踊運動が自分のものになる」という現象を具体的に捉え、表現する方法の検討をすること。また“繰り返し踊る”ということがどのような教育的効果につながるのか…という視点のもとに、これまでの実験題材として使ってきた、異なる感情を内包することを想定して作成した舞踊運動を実際の指導の現場で活用する方法を探る事が目的である。またこの研究はその結果を舞踊教育やダンスセラピーなど、舞踊指導に資することを前提としている。

<研究方法>

1. 実験授業の実施

上記研究目的に基づき、身体表現Ⅰ、Ⅱ・身体表現論・身体表現論演習(各半期・2単位)の授業を既に受講した学生10名を対象に実験授業を実施する。学生には特に今回の授業の意図は伝えずに、従来の授業の一貫として行った。実施期間の最初と最後に体感評価実験を行った。また毎回の授業後に、「動いてみて感じたこと、気づいたこと」を記述するように求めた。

◆被検者：十文字学園女子大学・幼児教育学科4年生10名

◆実験題材

舞踊運動1：<楽しい>を想定
快-やや緊張-やや興奮
コアとなる運動特性(弾む・軽やかな)

舞踊運動2：<悲しい>を想定
不快-弛緩-沈静
コアとなる運動特性(縮小的)

舞踊運動3：<怒り>を想定
緊張-興奮
コアとなる運動特性(急变的)

◆実施期間：2005年5月9・13・16・20・23・27日 計6回

2. 学生の授業後の記述をKJ法によりを分析

3. ビデオ記録及び授業者の内省記録の分析

山田、柴、坪倉の3者でビデオ記録を観察し協議した。

<考察の観点>

1. 学生の記述分析に関して

1. 1 分類基準を定める

①本研究において実施せられた学習方法が明確になるようにする。学習方法を、<覚える><繰り返し><一つ一つの動きに分ける>の3点とする

②学習方法の中に分類できない、被験者が動くことで気づいた事項を<気持ち、感じ、イメージ><身体><運動><変化・連続><人と動く><音楽・その他>の6項目に分類する。

1. 2 5月27日の資料から<はじめ>-<繰り返し>の学習法-<今は…>という、被験者の記述を時系列で比較する

1. 3 身体への気づきの変容を見るために、身体各部に対する言及をもとに比較する。

以上の観点から考察を試みた結果、実験授業担当者のこれまでの<即興・自分の動き>という学習方法に対して本実験で試みた<覚える・繰り返し・一つ一つの動きに分ける>学習は、被験者達の記述から、「与えられた動きを自分の動きとして表現する・・・表現する身体(自己)を意識する」ことを体験させることの出来るものだと考えられる。

2. 体感評価実験のビデオから

3種類の動きの時間の変化を比較し、この結果と学生記述とを総合すると

- ① 舞踊運動1、2は全員の時間が伸びている。
- ② 特に舞踊運動2の時間の伸びがおおきい。それだけこの動きがゆっくり、丁寧に、自分の身体と対話しながら動ける動きであるといえる。この動きにおける、<動く自分の気持ち>の記述が多い。
- ③ 舞踊運動3は、日常のテンポより速い動きであることと、大きな上半身を反らせるジャンプといった極めて非日常的な動きが入っているために、動きをこなすことに意識がおかれている。

- 1) 柴眞理子他「同じ舞踊運動を繰り返し踊ることと体感の関係について」
小高直樹他「舞踊運動における体感と物理量の変化」

第56回秋期舞踊学会抄録

<参考文献>

- 柴眞理子「体感による動きの感情価～舞踊経験者と未経験者の比較～」神戸大学発達科学部研究紀要第10巻第2号(2003)